〈特集〉太平山をめぐる歴史と文化

「太平山をめぐる歴史と文化」の企画にあたって

菱沼一憲

太平山は、古代以来、地域の歴史・文化を牽引してきた存在であり、山中・山麓には太平山神社をはじめ多くの神社・寺院が設けられ、歴史・文化が育まれてきた。さらに現在では桜・アジサイの名所、観光地として多くの人が集まる場所となっている。本学を含め國學院栃木学園は、その山麓に位置しており、本学もその育まれた文化の一端といえよう。

一九六〇年四月に本学園の高等学校が開校するが、その際には栃木県神社庁などからの働きかけがあり、ことに太平山神社小林敏三郎宮司のご尽力が大きかったとされる（木村好成理事長「創立60周年記念式典式辞（要旨）」『校報』六九八号、二〇二〇年十月）。その後、隣接して短期大学・中学校が開設され、太平山と本学は深くつながったまま現在にいたっている。

ことに本学日本文化学科日本史フィールドでは、その特性から太平山の文化財についていくつかの調査を介して関わってきた。近年では、栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業として太平山の石造物と大平山神社の絵馬の調査を行っている。石造物については平成二十七年・同三〇年に、絵馬については近世史専攻の坂本達彦教授を中心として同二十八年・二十九年・三十年・令和元年と成果報告書を刊行した（坂本達彦「國學院栃木短期大学における資・史料レスキュー活動」（『日本文化研究』六号参照））。今回の特集も、太平山と本学の歴史的・地理的な環境を踏まえ、引き続き太平山とその周辺に創出された歴史・文化を捉え直してみたいという企画である。

太平山とその周辺には、数多くの神社・寺院が営まれる神聖な地域と認識されている。それは関東平野へ足尾山地が、南東方向に鋭く突き出た先端部という地形的な理由がまず考えられる。足尾山地の先端部は太平山・晃石山・馬不入山の連なりをなし、古くは都賀山と称された。すなわち都賀郡を代表する山なのであろう。さらにその西南に関東平野に浮かぶ小島のように、岩舟山・三毳山が所在する。この両山の間を古代東山道が通じ、付近には三鴨駅が置かれ、太平山の南麓をかすめて下野国府に至る。慈覚大師円仁が生まれた小野寺、最澄が布教に赴き宝塔を建立した大慈寺など、足尾山地南東先端部は古代以来のパワースポットであり、太平山周辺もその一角をなす。

太平山の中腹にある太平山神社は、天長四年（八二七）、円仁が創祀したとされ、明治以前は大平山権現と称した。別当寺連祥院般若寺は天台宗寺院で、明治初年の廃仏毀釈により破壊されたが、明治三十七年（一九〇四）、太平山神社の表参道二の鳥居脇に再建された。連祥院は寛永十八年（一六四一）に江戸寛永寺末となり、太平山中の法泉院（三光院）・報恩院・多聞院・安楽院の四ヶ寺を支配した。

太平山神社の北東に真言宗豊山派の太山寺があり、天長十年、やはり円仁による創建と伝える。もと天台宗で、『下野国誌』は、太平山の日光権現の本地仏とする。延宝三年（一六七五）宥海の時に真言宗に転じ、四代将軍家綱の母宝樹院によって再建されたという。同寺観音堂の千手観音立像は、円通寺旧蔵とされ『下

野国誌』によると、円通寺は当初太平山にあり、その後、大平町川連に移転し、さらに皆川広照の栃木城構築にあたって城の南口にあたる現在地栃木市城内町に移されたとされる。

太平山の南斜面の中腹には曹洞宗大中寺がある。近世初頭には禅宗の関東僧録職、のちに天下大僧録職に任じられ、近世を通じて宗内行政を執った有力寺院である。延徳元年（一四八九）、小山成長が快庵妙慶を招いて開山したとされ、文亀二年（一五〇二）十月、古河公方足利政氏から中泉荘内西水代郷を寺領として安堵されている。上杉謙信の叔父良慶の代に法脈争いが生じ、榎本の大中寺と分裂し現在にいたっている。

著名な信仰施設を幾つか列挙してみたが、有史以来、太平山には大規模な神社・寺院が数多く所在しており、この地域の文化的中核となり、地域勢力のみならず中央政治とも強く関わっている。今回はささやかな取り組みではあるが、幸いにも貴重な論考をご寄稿いただけた。ことに神道学・民俗学・史学という学際的なアプローチができたことは、一つの成果といえよう。今後も栃木地域の歴史・文化の中核としての「太平山」を再確認し、それを将来へといかに継承・発展させてゆけるのか考えてゆきたい。